

聖書：ルカ 21：29～38

説教題：いつも油断せずに祈る

日時：2012年12月2日

イエス様はエルサレム神殿崩壊と重ね合わせて、やがての世の終わりについて語って来られて、今日はその最後の部分となります。まず29～31節：「それからイエスは、人々にたとえを話された。『いちじくの木や、すべての木を見なさい。木の芽が出ると、それを見て夏の近いことが分かります。そのように、これらのことが起こるのを見たら、神の国は近いと知りなさい。』」パレスチナのいちじくは、葉っぱが出て来るより早く実がなり始め、6月頃、第1回目の収穫があるそうで、その様子から夏の近さを知ることができるそうです。また、いちじくに限らず、「すべての木を見なさい」とイエス様は言っています。どんな木でもその芽が出てくると、夏が近いことを告げ知らせるしるしとなっていたのでしょうか。私たちの間にも色々なしるしがあります。寒さが和らいで梅のつぼみが膨らんでくれば、いよいよ春がそこまで来たと私たちは知ります。アジサイの花が咲き、そのあと梅雨が明けると、夏が本格的に始まると知ります。少し涼しくなり、虫の音が聞こえてくると、秋が来始めたと思います。セーターが欲しくなり、また木々が色を失って落ち葉が目立つようになると、冬がもう来るのだと思います。私たちもそのように季節季節の前兆を感じて生きています。それらのしるしによって、まだ本格的には来ていない季節がすぐそこまで来ていることを読み取ります。そのように、これらのことが起こるのを見たら、神の国は近いと知りなさい、とイエス様は言っておられます。

「これらのこと」とは何を指しているのでしょうか。それはこの章でイエス様が語って来たことすべてでしょう。8～11節には偽キリストが現れること、戦争や暴動、国同士の敵対関係、大地震、病気や飢饉、様々な天変地異が起こると語られました。12～19節にはクリスチャンの迫害、20～24節にはエルサレム滅亡、25節以降ではさらなる様々な混乱、世界的な不安が語られました。人々はこのような中で世界はこれからどうなっていくのかと恐れ、気を失うと言われました。しかしそんな中でクリスチャンは全く違った態度で生きることが述べられて来ました。

その一つは慌てないことです。9節で「こわがってはいけません。それは、初めに必ず起こることです。だが、終わりは、すぐには来ません。」と語られました。そして今日の32節にも「まことに、あなたがたに告げます。すべてのことが起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。」とあります。一つでも世の終わりのしるしらしきものを見たら、慌てて騒ぐのがクリスチャンではありません。これまで見て来ましたように、私たちが住んでいるこの世界は、このまま天国に変わることはできず、2ペテロ3章に記されているような、天は燃えて崩れ、地と地の色々なわざは焼き尽くされるというプロセスを通して行かなければなりません。そうしたさばきときよめのプロセスを通して、やがて新しい天と新しい地が現れます。その新

しい秩序に移行するために、今あるものが壊され、火で精錬されるようなプロセスを通るのは当然のことです。ですから私たちはイチイチ慌てないのです。それらは予め聖書で言われていることであり、ここにはっきり書かれていることです。

しかしだからと言って、「まだ来ない」とのんびり生活するわけではありません。神の国が近いと知るといのは、その日に向けて益々準備することでしょう。28 節で言われたように、人々が皆、下を向く状況の中で、いよいよ頭を上へ上げる生活をするのです。33 節にあるように、やがてこの天地は滅びます。しかしイエス様の御言葉は決して滅びません。ですから私たちはこのイエス様の御言葉にこそ信頼して生きるのです。この世界が揺り動かされても、決して揺り動かされない主の御言葉に基礎を置いて、この世界に起こる様々なしるしを読み取り、いよいよ頭を高く上げて行くのがクリスチャンなのです。

さて 34 節には、やがての日を待ち望む歩みの妨げとなるものがあることが警告されています。34 節：「あなたがたの心が、放蕩や深酒やこの世の煩いのために沈み込んでいるところに、その日がわなのように、突然あなたがたに臨むことのないように、よく気をつけていなさい。」ここにあなたがたの心が「沈み込んでいる」とあります。ここは新共同訳では「心が鈍くなる」と訳されています。私たちは主の再臨に備えて心が目ざめて、その感覚が敏感なものとなっているべきなのに、反対に私たちの心を鈍くするものがある。その一つ目は「放蕩」です。私たちは「放蕩息子」を思い起こすかもしれません。彼は父の身代を受け取るとさっさと遠い国へ出て行き、そこで湯水のように財産を放蕩しました。お金を使って次々に欲しいものを手に入れ、遊びたいと思っていた遊びに明け暮れました。その瞬間は楽しかったでしょう。これぞ私が求めていたことだ！と心の中で喜び叫んだことでしょう。しかしその状態は非常に危険です。なぜならその状態で彼は神のことを少しも考えていないからです。神をその心から追い出してしまっているからです。私たちはあの放蕩息子ほど、自分はお金を持っていないと思うかもしれませんが。しかし彼のように、この世の祝福をむさぼり求める心で一杯になっていることはないでしょうか。あれを買いたい、これを買いたい、そのために一生懸命に働いて、努力して、それを得る。しかし新しい製品が出ると、それも欲しくなって、それを得るために自分自身の全関心を注ぎ、追い求める。その結果、霊的に心が鈍くなり、イエス様を迎える準備を何もしていない。その日が突然わなのように臨んで初めて目が覚める。

二つ目は「深酒」。なぜ人は深酒をするのでしょうか。それは自分を麻痺させたいからでしょう。頭がはっきりした状態ではストレスがたまるので、少し自分を鈍くする。自分を鈍くすることによって、解決を図る。これはお酒だけの問題ではないでしょう。私たちもストレスがたまった時、あるいは心身共に疲れを覚えた時、どこに癒しを求めるでしょうか。ある人は趣味に、ある人はテレビを見ることに、ある人はスポーツに、ある人は美味しいものを食べることに、ある人は読書に求めるかもしれません。もちろんこれらはそれ自身良いことであり、神

が私たちに与えてくださった楽しみです。しかしイエス様に慰めを見出すより、それらの楽しみにどっぷりつかることに自分の癒しを求めるとしたら・・・あるいは疲れた時、自分を癒してくれるのはあの趣味だ！あの娯楽だ！あの食べ物だ！と、一直線にそれらに走って、それにおぼれるとしたら、それは深酒とどこが違うでしょうか。そのように神が視界から消えた形で、それらのものに過度に熱中しても、私たちの心は鈍くなるのです。そんな時に、イエス様の再臨の日が来たら、・・・。

三つ目は「この世の煩い」。この世で私たちが生活していく上では色々な心配があります。仕事、家事、育児、また今日何を着るか、明日何を食べるか。これもそれ自身では悪いことではありません。しかし私たちがそういったこの世の事柄に忙殺されていても、心が鈍くなるのです。あれもしなくてはならない、これもしなくてはならない。それらで心が一杯に占められて、神に心が向いていない。神のための奉仕でも、神との交わりが抜けているなら、この世の煩いと同じになる。

果たして私たちにとって、この放蕩や深酒やこの世の煩いに当たるものは何でしょうか。私の心を神から引き離し、鈍くさせているものはないでしょうか。もしそのような状態にあるなら、私たちは周りにある読みとるべきしるしを読み取れず、主の日が突然わなのように自分に臨むことになりかねません。だからよく気をつけていなさい、とイエス様は言われるのです。

では私たちはどうしたら良いのでしょうか。36節：「しかし、あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。」一言で言って、それは「祈り」です。神は御言葉を通して私たちに語ってくださいますが、私たちが自分の言葉で神に向かって祈らなければ、神との生きた関係は築けません。人間の場合でも同じです。しかし私たちが「神様！」と自分の言葉で祈る時、そこに生きた交わりが始まります。それまで遠く離れた存在でしかないと思っていた神が、こんな私に関わり、交わってくださる神であることを体験するようになる。

この祈りが単なる独り善がりの、自分の思いを神に告げるだけのものとならないように、やはり御言葉を聞き、御言葉に聞くこととセットでなされることが大切だと思います。御言葉なしで祈ると、ただ自分の頭で考えたことを祈るだけになりやすく、新しい世界は開けて来ません。しかしたとえ短い一節でもみことばを開いて、神の御声に聞くなら、その御言葉に基づく祈りが導かれて行きます。そして私たちの祈りは自分の願いを神に聞いてもらうより、神の御心に自分が沿う歩みをするための祈りへ導かれます。そして「いつも」とここでは言われていますが、そのためには一日の歩みの中でなるべく早い時間にその時をまず持つことが大事でしょう。夜寝る前に、聖書を開いて祈るだけでは、一日の反省ばかりになってしまいます。そうではなく、朝起きた時すぐでなくても、朝の用事が終わって一段落した時でも、早い内に神と

交わり、祈る時を持つ。そしてその日一日を、開いた御言葉と祈りによって導いていただく。そうするなら、神に心に向けて一日を始めた者として、日中でも事あるごとに神に心に向け、一つ一つのことについて短くても神に祈る者へと導かれるでしょう。終わりの日に向かう私たちの歩みには多くの困難があります。もし祈って神と交わらなければ、私たちは起こった出来事に振り回され、ため息をつき、いらだち、ついには絶望に至るだけでしょう。しかし日々御言葉に聞いて祈る生活をするなら、困難の中でも主に信頼し、上からの助けと力をいただいて、忍耐の歩みをし、約束のものを待ち望む歩みへと導かれるのです。

37 節を見ると、イエス様は昼は宮で教え、夜はいつも外に出てオリーブという山で過ごされたとあります。22 章 39～40 節を見ると、イエス様はいつものようにオリーブ山に行かれ、いつもの場所に着いて祈りをされた、とあります。つまり、「いつも油断せずに祈っていなさい」と言われたイエス様ご自身、常にそのように祈っておられたのです。そのように祈っておられたからこそ、イエス様は心が鈍くなることなく、目標をまっすぐ見据えて進む歩みが導かれたのでしょう。イエス様でさえ、この祈りを必要とされたなら、ましてや私たちにはそれが必要と言うべきではないでしょうか。

私たちは、その日がいつ来ても大丈夫な準備ができているでしょうか。放蕩、深酒、この世の煩いで心が鈍くなっていることはないでしょうか。イエス様はそうならないように、「いつも油断せずに祈りなさい」と語ってくださいました。私たちはこの言葉を感謝して、新しい気持ちで、いつも神に心に向けて祈る生活へ進みたいと思います。そのことによって私たちが霊の目をしっかり開いていることができますように。いつも神との交わりを通して、神の光の中を歩む者でありますように。そうする人は世の終わりの様々な困難に囲まれても、むしろいよいよ希望と確信を持って、頭を高く上げる生活へ導かれます。そしてかの日の栄光に向かって、自分の人生を整え、主が来られる日には心からの喜びを持って主をお迎えできる人へと導かれるのです。